

# 「地域おこし協力隊」の活動における意義と課題

—北海道鷹栖町パレットヒルズのマネジメントを事例として—

小山田 健・加藤 裕明

**抄録：**本研究は、北海道鷹栖町の公園、「パレットヒルズ」における「地域おこし協力隊」のマネジメントに焦点をあて、地域再生に向けた新しい価値の創造の観点から、その意義と課題を明らかにすることを目的とする。研究の結果明らかになった点は以下三点である。第一、パレットヒルズ（「モノ」）の活用をめぐり、「よそ者」である隊員 B 氏の活動によって、役場職員 A 氏も含め、地元住民が今まで気づけなかった「モノ」の価値に気づいたこと、第二、その「気づき」を含めて、住民がパレットヒルズで展開される多彩なアクティビティに新たな形で参加するようになったこと、第三、そもそもパークゴルフ場と桜の花見会場以外には町民の活用はほとんどなかったパレットヒルズが、多彩なアクティビティがくり広げられる場として、地元のみならず、他の地域からの関係人口をも誘引したことを明らかにした。

一方、本研究の課題は、第一、今回調査した隊員が、地元住民とどのようにして関係を築き、広げたのか、その詳細な方法を明らかにすること、第二、一方で、地元住民自身は、パレットヒルズの新しい活用法に、どのような価値を見出しているのかを明らかにすることである。

**キーワード：**北海道鷹栖町、パレットヒルズ、地域おこし協力隊、地元学、価値の創造

## 1. はじめに

北海道鷹栖町は、旭川市の北方に位置する、農業を基幹産業とする町である。人口 6,742 人（2021 年 3 月 31 日現在）に対し、65 歳以上の高齢者が人口の 34.9%（2,353 人）と、全国平均の 29.1%（総務省統計局・高齢者人口及び割合の推移 2021 年次数値）を上回っている。そこで、鷹栖町では、総務省「地域おこし協力隊<sup>1)</sup>」の制度を活用し、2017 年 6 月から 11 人（活動修了者 4 人、活動中 7 人）の隊員を採用している。このうちの一人である B 氏は、2018 年 12 月から採用され、東京から家族 4 人で移住し、鷹栖町にある公園「パレットヒルズ」のマネジメント（管理運営）を担当する。

本稿では、鷹栖町の公園、「パレットヒルズ」のマネジメントに焦点をあて、「地元学」の手法に学び、地域再生に向けた新しい価値の創造の観点から、その意義と課題を明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究・先行実践

「地元学」とは、水俣市出身の吉本哲郎が、「水俣病の解決と水俣病で疲弊した町の再生を環境からはじめようと、水俣病患者もいっしょになってみんなで取り組む中から生まれた言葉である。まず地元住民自身が調べ、「どうしてそうなのか考え、いまに役立てていこう」とする「地元で学ぶ」考え方として、1995 年に名付けたものである（吉本 2008：2-4）。「地元学」はまた、「ないものねだり」ではなく、その地元の「あるもの探し」を中心とする地域資源発見・評価手法である。そして地元住民だけでは「ひとりよがりになってしまうので外の人たちといっしょにやっていくことが必要」とな

る。「地域のもっている力、ひとのもっている力を引き出すことが外の人たちの役割」（吉本 2008：38）と位置付けられる。地元住民を「土の人」とするならば、外から来た「よそ者」は「風の人」である。「土」の地元学を基本とし、そこに「風」が加わって、従来から行われている問題解決型の地域づくりから、価値創造型の地域づくりへの転換が生まれるとする（吉本 2008：8）。

筆者（小山田）は、2013年、地域観光マネジメント人材育成セミナー実行委員会主催の「北の観光リーダー育成セミナー」において、この地元学を紹介し、セミナーの講師を勤めた（小山田、池上 2013）。そして、「土の人」と「風の人」が「ヒト」・「モノ」・「コト」の視点で、一緒に「あるもの探し」をするというフィールドワークを行い、その地域で生きてきた人びとから学び、そうして知ったさまざまな足もとに「あるもの」を、昔ながらの知恵と工夫も含めて新たに組み合わせ、組み替えて新たな価値を生み出すことを目標に実践を行った。

また筆者は、2018年から19年にかけて、本研究のフィールドでもある鷹栖町においてワークショップを行った。

そのひとつは「まちの声を聞き、まちと共につくる」というコンセプトをもとに、移住促進PR動画制作のために行った「鷹栖の未来予想図をみんなで考えるワークショップ（2018年8月26日実施）」である。また、今回の研究フィールドであるパレットヒルズでは、「町民とよそ者の意見を盛り込んだ巨大ぬりえをみんなで完成させよう（2018年9月17日実施）」というワークショップを行った。さらに翌2019年には、町内外の住民にパレットヒルズを知ってもらうため、「未来フェス（自分の将来や未来について語る会：2019年9月22日実施）」を実施し、翌日には、「SDGs視点で見る地元学（2019年9月23日実施）」を行った<sup>2)</sup>。

地元学にしたがえば、筆者は鷹栖町にとっての「風の人」である。筆者が実践した上記のワークショップでは、地元学とは何かを伝えることは出来たが、地元学を実践する上での鷹栖町の「ヒト」・「モノ」・「コト」の位置づけがあいまいであった。また例えば、鷹栖町のパレットヒルズを舞台として「巨大ぬりえ」に取り組んだ実践も、町民とよそ者の意見を盛り込んだ最終的なぬりえの下地絵を外部（印刷・デザイン）会社のイラストレーターが行ったという点で、「新たな価値」を創造するという点では反省が残った。

以上の先行研究・先行実践をふまえ、本研究では、地元学で言う「ヒト」のうち、「土の人」（地元住民）として鷹栖町総務企画課企画広報係の役場職員A氏を、また、「風の人」（よそ者）として鷹栖町地域おこし協力隊B氏をその代表として位置づける。また「モノ」を鷹栖町の公園「パレットヒルズ」に、そして「コト」を、「地域おこし協力隊B氏が行った取り組み」として整理する。その上で、A氏とB氏に行ったインタビュー結果を分析し、鷹栖町における公園マネジメントの活動が、地域再生に向けた新たな価値の創造という点でどのような意義と課題を持つのかを明らかにする。

### 3. 研究方法

本研究の方法は、インタビュー調査とその結果の分析である。具体的には、鷹栖町パレットヒルズの管理・運営に当たる、鷹栖町役場職員A氏と、「地域おこし協力隊」B氏に焦点をあて、インタビューをする。その目的は、鷹栖町が持つ地元の「あるもの」を組み合わせ、あるいは組み替え新たな価値を創造するという点で、B氏の活動はいかなる意義と課題を持つのかを明らかにすることである。インタビューの方法は、小山田が、2021年12月23日に現地鷹栖町役場において、鷹栖町役場職員A氏に、

また、同日、パレットヒルズ管理棟において「地域おこし協力隊」隊員 B 氏に対しインタビューを行った。インタビューの方法は、あらかじめ、「モノ」としての鷹栖町の公園「パレットヒルズ」の歴史と現在について、また「コト」としては、役場職員 A 氏に公園担当職員としての公園管理業務の現状と課題について聞き取りを行った。

一方で、地域おこし協力隊員の B 氏に対しては、「パレットヒルズ」をフィールドとした新たな活動内容について聞き取りを行った。いずれも、上記のようにある程度質問テーマを定めるものの、聞き取りの中で、新たな疑問や興味深い対象が生まれた場合は、その都度質問を加えていく半構造化インタビューの手法をとった。

## 4. インタビュー調査 I

### 4.1 インタビュー調査 I の概要

インタビュー調査 I は、2021 年 12 月 23 日 午後、小山田が鷹栖町役場において、鷹栖町総務企画課企画広報係係長 A 氏に対して行ったものである。パレットヒルズの歴史と現在に関する半構造化インタビュー調査である。以下に回答内容を紹介する。

### 4.2 「パレットヒルズの歴史」－ 1996 年～ 2013 年－

A 氏は、2020 年度 4 月から鷹栖町総務企画課企画広報係係長に就任した。A 氏は、総務企画課に保管された資料を参照しながらパレットヒルズの歴史を語ってくれた。それによると、1996 年当時はまだ「蛇山<sup>へびやま</sup>」と呼ばれ、整備も行われていない草地の丘だった。利用するものはほとんどおらず、せいぜい冬、スキーやかんじきなどで遊ばれていた程度だった。そこで、町は、パレットヒルズの活用方法を町民へ提案し、公民館ごとに話し合いが行われた。そこでの話し合いから、植樹などを実施するようになった。1998 年、「蛇山」に代わる名称を募集するため、懸賞雑誌に 10 万円の懸賞金をかけ名称の募集を行った。全国から 2774 作品が集まり、そこから 14 点に絞り込み、選考委員の最終投票と、課長会議を経て、「パレットヒルズ」に決定した。鷹栖を離れた人たちが 10 年後、20 年後も覚えていられている名称であることなどが授賞理由だった。基本的な活用構想として出たアイデアは、「桜の杜」、「水辺の広場」、「味覚の杜」、「木々の広場」、「冒険の杜」、「静寂の杜」、「紅葉の杜」、「ふれあい広場」、「ファミリースロープ（冬スキー用）」等であった。それらを発表し、パレットヒルズ推進委員会など町民有志のボランティアが中心となって整備を始めた。この後、町民による活用アイデアが出て活動も活発になっていった。

いま、A 氏への聞き取りから 1998 年以降の動きとして明らかになったパレットヒルズに関わる活動内容と、活動の主たる担い手を表 1 にまとめる。

表 1 パレットヒルズの歴史と現在（活動内容）筆者（加藤）作成		
年	活動内容	活動の主たる担い手
1998	木々の杜、水辺の広場などを整備し、ミズナラ 150 本を植樹した。	パレットヒルズ推進委員会
1999	木々の杜、水辺の広場、さくらの杜を整備し、桜・イチイなど 180 本を植樹した。以降、毎年継続した。	同

2000	町民参加の植樹祭を開催し、桜 180 本を植えた。以降毎年実施した。また、商工会、商工会女性部、森林組合による植樹なども行われるようになった。	推進委員会＋商工会、商工会女性部、森林組合など
2001	市内の企業から桜の苗木の寄贈があり（2009 年まで）、植樹祭も継続した。	一般企業
2003	活動の担い手がパレットヒルズ推進委員会から、「パレットヒルズを育てる会」へ移行する。企業からの桜の苗木の寄贈や、高校生などによる植樹も行われる。	パレットヒルズを育てる会＋一般企業など
2007	パークゴルフ場の整備が始まる。	町
2009	パークゴルフの試打会や、パレットヒルズを考える町民の集いを行う。	町・町民
2010	パークゴルフ場（ふれあい広場）をオープンする。指定管理業者に管理運営を委託する。また、この年から「さくらフェスタ」が開催される。	指定管理業者（パークゴルフ）、鷹栖町観光協会（さくらフェスタ）
2013	『パレットヒルズ構想』（初版）をつくり、「自然と共生した杜」、「町民と行政との協働作業による手づくりの杜」、「自然体験など新たな観光資源としての杜」、「次世代に引き継ぐ町民の杜」の「基本方針」を打ち出した。	鷹栖町総務企画課

2013 年の『パレットヒルズ構想』の基本方針により、鷹栖町は、「景観の保全と創出（大雪山を一望できる景観と木々や緑地の保全・創出）」、「交流（世代を問わず利用できる環境を生かし自然との共存を目指した交流活動の実現）」、「参加（町民自らの作業による協働の公園づくりを創出し人と共に成長・進化する）」、「地域活性化（町内産業とのリンクにより多様なレクリエーションを創出し様々な場面で地域資源の発掘や消費を促進）」、「レクリエーション（自然を満喫しながら健康・憩い・心の豊かさを実現できる拠点の形成）」といった具体的なパレットヒルズの活用案を示した。

そこでは、パレットヒルズは、自然との共生の中で健康・心の豊かさ・楽しさに満ちた町民と共に常に進化し、四季を通して自然を満喫できる 21 世紀型の公園となることが目指された。

整備のポイントは、以下の四点である。第一、持続可能な公園づくりを目指し、「環境保全の取組（自然環境資源の魅力を活かした自然とのふれあいの場を提供するため、今ある環境を大切に、多様な空間を創出する。また、自然環境に配慮した事業手法を採用し多様なニーズに応じたプログラムを提供する）」、第二「町民との協働（公園パートナーとして、これまでの植樹以外での公園づくりの参加ができる場面の創出。また、町民参加のイベント実施や、公園管理運営への町民参加のニーズの変化に対応できる体制の堅持）」、第三「福祉社会の対応（高齢者をはじめとした福祉社会への対応として、施設にはユニバーサルデザイン化を施し様々な人が利用できる環境を創出する。また、子どもをはじめとして、安全安心を守れるよう配置しながら親しまれるよう整備する）」、第四「広域レク需要（既存のパークゴルフ場を含め、ハイキングやピクニック、トレッキングなど家族で楽しめるアウトドア活動の需要に対応した整備。また、家族が 1 日遊んでも満足でき、リピーターとして再来場を望めるレクリエーションニーズの創出や、多人数でも対応できるサービス施設の充実）」（鷹栖町ホームページ、以下 HP）であった。

これらの構想を進める課題としては、以下三点があげられた。第一に、運営組織の立ち上げから公園づくりの参加・活動の展開（町民参加型の管理・運営を目標とするのが望ましく、事業の進行に併

せ、行政と協働で管理・運営のマニュアルづくりを進めることが必要)、第二に、運営ノウハウと人材の発掘・育成(パレットヒルズの適切なエリアを利用した定期的な体験型ワークショップを開催しながら、体験学習運営のノウハウや公園の良好な自然資源などの情報を蓄積しつつ、継続的に運営に参加する人材が必要)、第三に、財源の確保(都市公園の利活用は、数多くのボランティアによって支えられているのが一般的であるため、参加者からの実費徴収だけでは安定財源を確保するのは無理である。プログラム立案のための調査研究や企画、広告宣伝費にかかる費用、リーダーやリーダーを補佐する人材の費用にあてる財源確保が必要)であった。

以上の経緯と課題をふまえ、鷹栖町は2018年12月、パレットヒルズのマネジメント担当として、総務省の「地域おこし協力隊」に応募した。その結果、採用第1号となったのがB氏であった。A氏は、立場上B氏の上司という関係にある。役場内では、最も近い立場でB氏のパレットヒルズにおけるマネジメントを見守る職員である。

#### 4.3 パレットヒルズ活動実績について

B氏が採用される以前は、「キャンプ利用者」(春夏秋)は、2016年度で104人、2017年度で38人、2018年度で87人であった。ところが、B隊員が採用となった2019年度には333人、2020年度は1643人、2021年度は3066人と利用者が激増した(総務企画課資料)。コロナ禍の非常事態宣言による入場禁止中も含めた数字である。ちなみに、2021年度からのキャンプ利用(春夏秋)については、大人1名につき300円(高校生以下無料)の入園料を取るようになった。

そのような中で、B氏はコロナ禍で中止していた冬の開放日である「スノーランド」(パレットヒルズを舞台に行う冬のアクティビティ)を再開させた。B氏は、これまでのスノーランドの内容を一新し、2021年12月25日から、「<sup>ゆきいた</sup>雪板」<sup>3)</sup>、「スノーシュー」<sup>4)</sup>、「ファットバイク」<sup>4)</sup>などのアクティビティを加え開催した。

A氏は、このような利用者の増加や、多彩なアクティビティの実践は、「B氏のおかげである」と繰り返し語った。筆者(小山田)は、そこにA氏のB氏に対する感謝の思いを感じ取った。それは、利用者の増加や多彩なアクティビティの実践にもあるが、それだけではなく、A氏の言葉を借りれば、B氏自身の「腰が低く、常に一生懸命に仕事を行う姿勢」そのものに向けられた言葉であったと感じた。後述するがB氏から受ける筆者の印象もA氏と同様である。

以上の活動の結果、パレットヒルズの冬の利用者(12月1日～3月21日)は、2019年度では20名だったが、2020年度には232名へ増加した。町は、冬のキャンパーの利用が想像以上であったことから、2021年度から、冬期のキャンプ利用についても、大人1名につき300円(高校生以下無料)の入園料を取ることにした。

これまでのパレットヒルズは、小さな子供たちや、パークゴルフを楽しむ高齢者が多かったが、B氏が上記のようなアクティビティを使って楽しむイベントを多彩に展開したことにより、地元鷹栖町の「モノ」を使って余暇を楽しむ「現役世代」(10歳～50歳)が増えてきた。A氏は、あらためて、「B氏だからこそ」このような変化が地元にも生まれたのだと語った。それは、パレットヒルズが、地元住民だけでは見出しえなかった価値を生み出したことに気づいた語りであった。

また、B氏の活動に刺激を受けた他の地域おこし協力隊員たちが、新たなイベントをパレットヒルズでおこなった。さらに、町内で立ち上がった「まちLABO(鷹栖町在住または鷹栖町と関わりの

ある10代～40代の30名が、2021年6月から12月までの7か月間6チームに分かれ、自分たちで企画、準備したプロジェクト実践活動」の一部がパレットヒルズを舞台として展開したとA氏は語った。ここでは、鷹栖町にとっての「関係人口」<sup>5)</sup>の増加をうかがうことができる。

## 5. インタビュー調査Ⅱ

### 5.1 インタビュー調査Ⅱの概要

インタビュー調査Ⅱは、2021年12月23日 午後、パレットヒルズ管理棟において鷹栖町の「地域おこし協力隊」B氏に対し、小山田が行ったものである。パレットヒルズのマネジメントやB氏の取組について、半構造化インタビューの方法で聞き取りを行った。回答内容を以下にまとめる<sup>6)</sup>。

### 5.2 B氏が鷹栖町「地域おこし協力隊」隊員に採用されるまで

B氏は、2018年12月、東京から鷹栖町へ移住した、40代の寡黙な男性である。もともと北海道に対する憧れを持っており、毎年旅行で来道していたが、鷹栖町については知らなかった。たまたま東京で開催された「本気の移住相談会」へ行き、偶然空いていた鷹栖町のブースへ足を運んだことが移住のきっかけとなったという。鷹栖町は病院が多い旭川市に隣接しているということがわかり、子育てもしやすそうな印象を受け、5日間の就農体験ツアーに一人で参加した。そこで、4軒の農家の世話になり、ますます鷹栖町が気に入り、夏休み、家族で鷹栖町を訪れた。家族（妻と子ども2人）も気に入り、相談会からたったの3か月で移住を決断した。

住宅は、役場職員に紹介された郊外にある元農家の自宅を購入した。300坪の畑を有する農地付き空き家だったが、現場も見ずに写真だけで購入を即決した。築40年という点がやや不安ではあったものの、建物はきれいに保たれており、納得のいく住まいだった。ただし、B氏は東京での仕事があるため、まずは妻と子ども2人が移住した。息子に友達ができるか心配していたが、近くに同級生もいて、すぐに仲良くなっていて安心したという。子どもたちは、学校から帰ると、ランドセルを放り投げて家庭菜園の畑に向かうのが日課のようである。

鷹栖町への移住の決定、住まいの決定、妻子のみの移住を経て、B氏は東京の職場を退職した。そして、鷹栖町へ移住してくるが、当時は仕事が決まっていなかった。移住後、地域おこし協力隊の募集を知り、その内容がパレットヒルズのマネジメントであった。興味が沸き、応募し採用された。東京では小さいころからスケートボードをしており、身体を動かすことが好きだった。その経験が、春夏秋のパレットヒルズの活用案であるスケートボードパーク構想につながることになる。実際、このスケートボードパーク構想は、2020年2月に発行された「パレットヒルズ構想」第2版に掲載されることになる。第2版には、またB氏の提案による数々の冬のアクティビティ（後述）も掲載された。

### 5.3 「地域おこし協力隊」の活動

先にみたように、パレットヒルズにおけるB氏の取組について、A氏は評価するものの、B氏自身にとっては、失敗の連続であったという印象が強いようである。企画したもののうまくいかないイベントも少なくなかった。

活動を開始した2018年12月から2019年3月頃までは、相談できる人が少なかったため、主に、ひととのつながりを求めた。先にも記したように一見寡黙なB氏だが、人脈づくりは精力的に行っ

ている。後述するが、そのつながりが、パレットヒルズの利活用に生きてくる。道内各地の勉強会に参加したり、地域住民へのヒアリングを行ったりした。この期間に、他の市町村で採用されている地域おこし協力隊ともつながることができた。

移住して4カ月後の2019年3月9日～10日に向け、冬期キャンプの企画「第1回パレキャン（パレットヒルズキャンプ）～雪景色バージョン」を開いた。が、参加者はほとんどいなかった。

ところが、翌日の教育委員会が行った「タカスノーランド in パレットヒルズ」には300人が集まった。また、同年5月には、鷹栖町観光協会が行う「桜フェスタ」のサポートを行った。約900人の来場者を目の当たりにし、パークヒルズの「ポテンシャル」の高さを実感した。つまり、パレットヒルズで何か（「モノ」）を企画すれば「ヒト」が集まるという実感を得た。

同年6月には、旭川市のゲストハウス経営者とともに、三角ベースやドッチボールなどを行うイベントを企画した。それほど多くの集客につなげることはできなかったが、ゲストハウス経営者の関係者は約20名来場した。

2019年8月11日～14日、4日間のキャンプフェスティバルを企画し、期間中約100人が参加した。他の市町村や鷹栖町の地域おこし協力隊員、さらには町内外の市民に協力を仰いだ。展望台でのモーニング珈琲（無料）や、テントサウナ、焚火イベントなど、期間中日替わりでイベントを行った。B氏のこだわりは「大雪山の見える景色」であった。大雪山を眺めながらモーニングコーヒーを味わうという一見シンプルな企画にも「ヒト」が集まることを知り、自分のアイデアに手ごたえを感じた企画であった。

なお、キャンプ利用（無料）は、2016年度から行い、104人（2016年度）、38人（2017年度）、87人（2018年度）、333人（2019年度）と推移している（図1）。この4日間に訪れた数が増加に貢献していると言える。2020年度と2021年度は、コロナ禍で運営できない期間があった。また、2021年度は、先述した通り、キャンプ場を有料化し、利用料を300円（1名あたり\*高校生以下無料）とした。これらにもかかわらず、1643人（2020年度）、3066人（2021年度）と利用者が5倍そして10倍へと増加した（図1）。

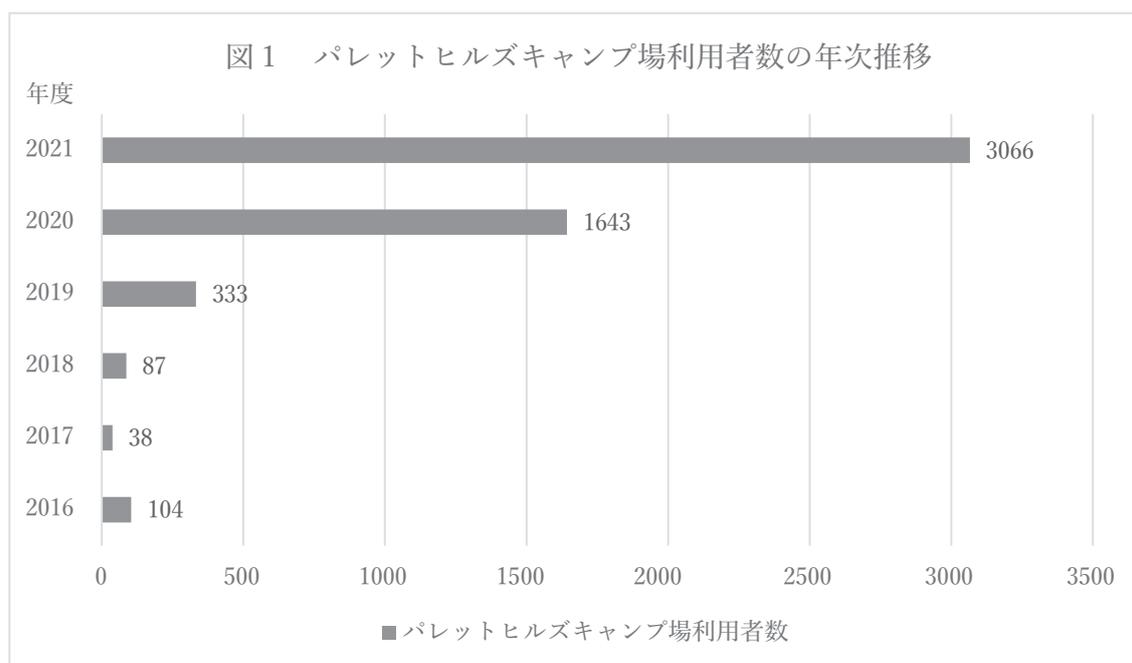


図1 鷹栖町総務企画課企画広報係 A 氏提供資料「パレットヒルズ活動実績」より筆者作成。

B氏によれば、この増加の背景には、コロナ禍で室内の3密を回避したい人々の意識と、他の地域で人数制限をかけたために、キャンプ場に入れなかった利用者が流れてきたことが考えられる。特に鷹栖町に近い当麻町のキャンプ場からの利用者が多いようであった。ただし、当麻町はB氏自身のつながりのある関係者がキャンプ場の運営にも関わっており、そのつながりも無視できない。

一方、冬のパレットヒルズキャンプ場の利活用としては、2019年の冬から、キャンプができる開放日を設置した。2019年度は利用者が20人しかいなかったが、翌2020年度（12月～21年3月）は232人と10倍に増加した。この背景には、B氏が本格的に実行した「冬のパレキャン」（パレットヒルズキャンプ）がある。その期間中、「雪板滑走会 with オレンジマン」、「スノートレッキング」、「冬の展望台解放」等のアクティビティを多彩に行った結果、利用者数が増加した。利用者からは「夏とはまた違う景色を見ることが出来ました。」「環境・体験学習ゾーンはあまり知られていない秘密基地」等の声が寄せられている（鷹栖町HP）。

## 6. 考察と課題

本研究によって明らかになった点は以下三点である。第一、パレットヒルズを「モノ」として、地域おこし協力隊員としてB氏（「風の人」）がやって来たことにより、役場職員であるA氏をはじめ、地元住民（「土の人」）が、地元の「モノ」が持つ新たな価値に気づくきっかけを得たことが明らかになった。第二、その「気づき」を含めて、「土の人」が地元の「モノ」で展開される多彩なアクティビティに新たな形で参加するようになったことを明らかにした。第三、そもそもパークゴルフ場と桜の花見会場以外には町民の活用はほとんどなかったパレットヒルズが、多彩なイベント会場として、地元のみならず、他の地域からの関係人口をも誘引したことを明らかにした。

一方、本研究の課題を以下二点にまとめる。

第一、そもそも鷹栖町の名前すら知らなかった「風の人」B氏が、地元の「土の人」たちとどのようにして関係を築いたのか、その具体的な方法を明らかにすることである。管見の限りではあるが、B氏のように、地元は言うまでもなく、より広く隣接地域にいたるまで人脈を築くような「地域おこし協力隊」員は多くはない。寡黙なB氏のいかなる資質や方法が、「ヒト」と「ヒト」とのネットワークを築いていくのだろうか。そこを明らかにすることが第一の課題である。

第二、一方で、「土の人」である地元住民は、従来から地元にある「モノ」としてのパレットヒルズを舞台として、B氏が取り組んだ数々の新しい「コト」に対し、どのような価値を見出しているのだろうか。今回の研究では、パレットヒルズキャンプ場で展開されたB氏の多彩なアクティビティの実践や、それに関連しての利用者数の増加に、その一端を読み取ることができた。しかし、単にイベントを行えばそれらが可能となるというものではないだろう。B氏へのインタビューからは、「ヒト」から学ぶことを重視する姿勢が感じられた。それが多彩な人脈ネットワークをつくり出していたと考えられる。自ら参加者と対話し、参加者同士もつなげていくB氏の行動をふまえるならば、B氏は単なるイベント発案者ではないだろう。「土の人」たちは、B氏という「風の人」との出会いから生み出された新たな「コト」に、どのような価値を感じているのだろうか。その具体的な質を明らかにすることが第二の課題である。

そもそも筆者自身が鷹栖町にとっては「風の人」である。「よそ者」であることを自覚し、B氏のように謙虚に「土の人」から学ぶ姿勢をもってフィールドワークを行っていきたい。

以上をふまえ、今後さらに、鷹栖町をはじめとした地域創生の現場の「ヒト」「コト」「モノ」の関係を明らかにする調査・研究を行っていききたい。

## 注

- 1) 「地域おこし協力隊」とは、地方への人の流れを創ることを目的として、過疎地域や離島などを持つ地方自治体が、都市部の人材を新たな担い手として採用し、地域力の充実・共用化を図る取り組みである。任期は概ね1年以上、3年未満である。(2022年1月7日取得。 [http://www.Boumu.go.jp/main\\_BoBiBi/jichi\\_gyouBei/c-gyouBei/02gyoBei08\\_03000066.html](http://www.Boumu.go.jp/main_BoBiBi/jichi_gyouBei/c-gyouBei/02gyoBei08_03000066.html))
- 2) これら一連のワークショップの内容をベースとした映像作品は、『鷹栖町移住ドキュメンタリー case.02 KEY OF LIFE 北海道から鷹栖から (Ai-D Graphics 制作)』としてまとめられ、一般社団法人北海道映像関連事業者協会主催の北海道映像コンテスト2019において最優秀賞を受賞した。また、全国地域映像団体協議会主催 全映協グランプリ2019「地域振興コンテンツ部門」においても優秀賞を受賞した(鷹栖町HP)。
- 3) 雪板とは、雪の上で滑る板の事であるが、夏期においても、パレットヒルズの草原を滑ることが出来る楽しいアイテムである。B氏は、その制作ワークショップから市民を集め、夏冬含めてパレットヒルズのイベントを開催している。
- 4) 「ファットバイク」とは、太いタイヤを持つマウンテンバイクである。雪板同様、夏冬通してパレットヒルズを楽しむアイテムである。
- 5) 「関係人口」とは、田中(2021:77)によれば、「特定の地域に継続的に関心を持ち、関わるよそ者」であり、「定住人口でも交流人口・観光客でもなく、そして、企業でもボランティアでもない」新たな地域外の主体と位置付けられる。
- 6) 事実確認のためクナウマガジン編集部(2018)『北海道移住の本 りくらす vol.3』ソーゴ印刷(株)クナウマガジン発行。を参照した。

## 文献

- クナウマガジン編集部(2018)『北海道移住の本 りくらす vol.3』ソーゴ印刷(株)クナウマガジン発行。
- 小山田健、池上美穂(2013)『北海道北の観光リーダー養成セミナーテキスト』「第5章 地域資源調査 地元学」地域観光マネジメント人材育成セミナー実行委員会発行。
- 鷹栖町ホームページ(2021年1月7日取得。 [https://www.town.takasu.hokkaido.jp/kankou\\_event/event/parettohuyukyan.html](https://www.town.takasu.hokkaido.jp/kankou_event/event/parettohuyukyan.html))。
- 田中輝美(2021)『関係人口の社会学 人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会。
- 吉本哲郎(2008)『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書、東京都。

# **Significance and challenges on the activity of Community-Reactivating Cooperator Squad: Case Study about Palette Hills Management in Hokkaido Takasu-cho**

OYAMADA Ken and KATO Hiroaki

**Abstract:** Purpose of this paper is to clarify significance and issue about management by *B* who is Community-Reactivating Cooperator Squad (CRCS) in Palette Hills Park(PHP) in Takasu-cho Hokkaido. The results are as follows. First, it became clear that the residents in Takasu-cho, including *A* had been paid attention to the activity of *B* who was an immigrant as CRCS. Second, local people had been participated in various of activities designed by *B* in PHP. Third, Not only Takasu-cho residents but neighboring area's people had been participated in a new activity of PHP.

On the other hand, the issues of this study are as follows. First, it is necessary to examine how *B* build the relationship of mutual trust with residents. Second, it is necessary to examine what kind of value the residents find out in new activities designed by *B* in PHP.

**Keywords:** Hokkaido Takasu-cho, Palette Hills Park, Community-Reactivating Cooperator Squad, Jimotogaku (Community Study), value creation